

第3章 佐伯市の歴史文化の特徴と関連歴史文化資源群

第1節 歴史文化の特徴

第1章・第2章で述べたように、本市の海岸部では複雑な海岸線に島が点在し、山間部には険しい山々に多彩な地質が分布する。そして一級河川 番匠川^{ばんしょうがわ}をはじめとした大小の河川が山間部と海岸部をつなぎ、その下流域が市街地として発展してきた。佐伯の人々は、それぞれの地域で環境を巧みに利用した生活を営んで、特色のある歴史文化を生み、受け継いできた。また、佐伯の歴史文化は独自に生み出されたものだけでなく、海や山を越えてもたらされ、地域の文化として根付いたものも少なくない。

ここでは、本市の歴史文化の特徴を、その基盤となる地勢に応じて4つに整理した。まず佐伯の海、山、里それぞれの人々の生活や、海と山の資源を背景に展開してきた歴史を理解する。また一方で、佐伯は豊後と日向の国境に位置し、さらに豊後水道や瀬戸内海を通じた交流も盛んな地域であった。地域をまたいで、より広域的に捉える視点も加え、本市の歴史文化の多様さの背景にある、多地域の結節点としての特徴も取り上げる。

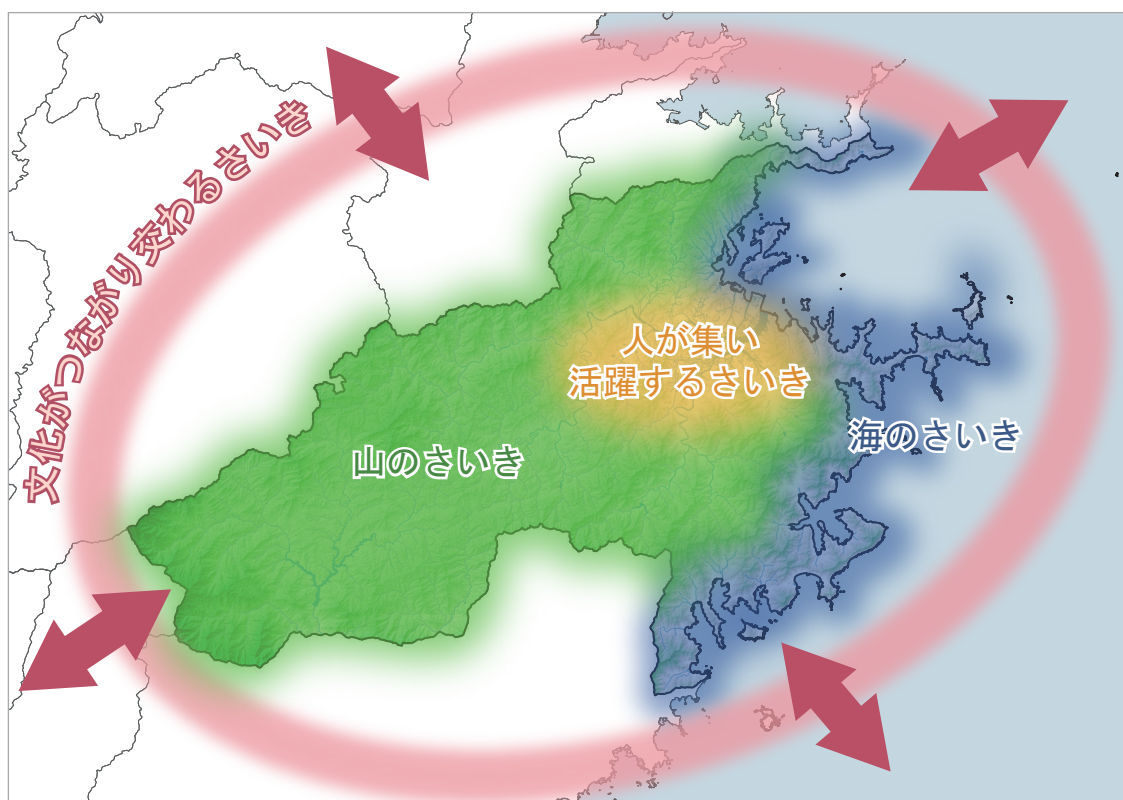


図 3-1 本市の歴史文化の特徴

【1. 海のさいき】

本市の海岸部は日豊海岸国定公園の一画をなし、その特徴であるリアス海岸特有の突出した半島と湾が連続している。黒潮のために気候は温暖多雨で、各地区に海岸性の環境を反映した自然林や景勝地が見られ、海中にはサンゴ礁が広がる。本市は大分県内でも天然記念物の指定件数が最も多く、特に海岸部では自然林や自生地指定が多いことも、豊かな環境が良く保たれていることを示している。

現在の本市が質の高い海産物や、それを活かした食文化で知られているように、海の恵みは人々の生活を支えてきた。歴史をさかのぼれば、海はひと・もの・ことが行き交う交通路でもあり、上浦・鶴見・米水津・蒲江の各地区では、要所となる集落が拠点となって発展してきた。とりわけ豊後水道を介して、四国や瀬戸内海を通じた近畿との盛んな交流によって、佐伯は外へと開かれた地域でもあった。

古くは縄文時代から、北部九州・南九州・瀬戸内それぞれを中心とする文化圏の影響を受ける位置にあり、古墳時代には佐伯湾周辺の川や海を支配した権力者が、佐伯湾周辺の古墳に葬られた。奈良時代には、海人が多く住むことにちなんで名付けられた、海部郡穂門郷の一部であったと考えられる。その後平安時代から勢力を伸ばし、戦国時代までこの地を支配した佐伯氏一族は、豊後水道を介して四国の勢力と連絡を取っていたことが文献史料に残る。江戸時代の佐伯藩は、漁業の保護とともに魚付き保安林の保護など漁場保全に通じる施策を取り、豊富な海産資源や干鰯をはじめとした加工品は、藩の財政を支えた。また、海岸部の漁業活動や、古くから発達していた海上交通網を利用した輸送にかけた各種の税収入も、非常に大きなものとなった。佐伯藩にとって海は、漁業資源の源として、また多額の税収をもたらす場として、極めて重要であった。

明治時代になると、漁業以外に傾斜地を利用した農林業や、出稼ぎも重要な収入源として成長していった。また大正時代には太平洋から瀬戸内海への玄関口となる地理的重要性が注目され、日本防衛の拠点として豊後水道沿岸部の各地に砲台が築かれ、昭和期には佐伯地区に佐伯海軍航空隊が開隊し、市街地発展の契機ともなった。

このように、佐伯の海岸部の人々は海とともに歩んできた経緯があるが、地震や津波による被害に襲われることもあった。その被害状況や対応策は各地の古文書などに残され、教訓を伝えている。

【2. 山のさいき】

海岸部の豊かな自然を育むのは、本市域の中部から西部を占める山間部である。祖母・傾山系に連なる山々には、番匠川と五ヶ瀬川の2本の水系が広がり、そのうち番匠川とその支流は、東流して佐伯湾に注ぎ、豊富な栄養素を提供している。祖母・傾国定公園の一部となっている本市の山間部には、砂岩・泥岩を主とする険しい地形のなかに、石灰岩層や凝灰岩層も分布している。石灰岩層では神秘的な景観をもつ鍾乳洞が長い年月をかけて形成され、凝灰岩層は多様で豊富な石造物の素材となった。気候も海岸部とは大きく異なり、一部地域で保たれている山間地域特有の植生が、そ

れを表している。これらの地質や、そこで育まれる植生を背景に、山間部での生活は成り立ってきた。

人々は番匠川・五ヶ瀬川とその支流が作り出した河岸段丘に集落を形成し、そのうち比較的大きなものが周辺地域を束ねる拠点となった。このような地理的条件から、水田耕作には不向きであったものの、弥生地区や直川地区では、比較的大きな平坦地を利用して稲作が営まれ、佐伯藩の石高の大部分を生産していた。

一方で、豊富な森林資源や水はけのよい地形を生かした生業も多い。本匠地区では製茶業が、直川地区では炭焼きや製材などの林業が発達し、弥生地区では楮を原料とする製紙業が行われた。これらの産物は山間部を代表する商品となり、江戸時代以降の経済を支える柱となった。近代以降は植林が進み、直川地区で生産されるスギが、高級建築材や酒樽材として高く評価された。

また宇目地区は、奈良時代には大野郡宇目郷、江戸時代には岡藩領に属し、海部郡であった他地区とは異なった歴史的背景がある。鉱物資源に恵まれ、木浦鉱山の経営は岡藩の重要な産業となり、水ヶ谷では窯業が行われた。木材を加工する木地師の活動や、現在にまでつながるシイタケ栽培に関する逸話もある。現在、祖母・傾・大崩ユネスコエコパークの一部を構成しているこの地区では、自然環境とともに独特な歴史文化資源が今も根付いている。

このような様々な産物や技術・文化が行き交った佐伯の山間部では、豊後と日向を南北に結ぶ日向道が主要な交通路となっていた。日向道は文化的な往来だけでなく、戦国時代末期の島津氏による豊後侵攻や豊臣秀吉の九州平定の行軍路となったほか、明治時代初頭の西南戦争では激戦の舞台ともなった。山間部に残る多数の山城や台場群は、戦闘の激しさと、豊後と日向の国境に位置する地理的な重要性を物語っている。

【3. 人が集い活躍するさいき】

九州山地に連なる祖母・傾山系に源を発し豊後水道に注ぐ番匠川と、その水系に属する大小の河川は、その河口部に佐伯では数少ない大きな沖積地を形成した。また番匠川水系の河川は、近代以前は船を利用した重要な交通路でもあり、佐伯地域一帯の要所となっていた番匠川下流域に海・山の資源や情報が集約され、人々が集まり大きな市街地へと発展した。

佐伯湾を見下ろす島や丘陵斜面に築かれた古墳は、葬られた有力者の権力拠点が、佐伯湾の周辺にあったことを示している。平安時代から戦国時代にかけては水軍を擁して、佐伯湾や豊後水道から日向灘までの交通を支配したとされる佐伯氏の根拠地となり、その繁栄を物語る歴史文化資源や遺跡が各所に残っている。

近世には佐伯藩の初代藩主となって入部した毛利高政のもと、佐伯藩の中心となる佐伯城と城下町が建設された。石高2万石の小藩ではあったが、山間部から海岸部まで多様な自然環境を抱えた佐伯藩は、水産業収入を軸とした高い経済力を持っていた。また、近世を通じて藩主家の交代がなく、比較的安定した治世の結果、毛利家資料や藩政史料などの豊かで質の良い資料が数多く残されている。

このような豊かな資源や経済力を背景に発展した佐伯城下は、6代藩主 高慶^{たかやす}による学問奨励や、8代藩主 高標^{たかすゑ}による佐伯文庫の収集、藩校 四教堂^{しこうどう}の設立によって、数多くの優れた思想家や学者、いわゆる先哲を生み、全国へと送り出した。

番匠川下流域は、海・山の資源と物流に支えられ、佐伯地域の政治・経済・文化の中心として発展を続けている。

【4. 文化がつながり交わるさいき】

豊後と日向の国境に位置し、さらに四国とも近い本市の歴史は、多くの地域との交流によって営まれてきた。この交流を支えたのは、豊後水道を介した海上交通路と、宇目地区を南北に通る陸上交通路の日向道、そして本市内の海岸部と山間部をつなぐ番匠川水系を利用した河川交通路である。

海岸部では、縄文時代から中国・四国を含む瀬戸内との関係が深く、平安時代には近畿の影響を受けた石造物や仏像が造られている。江戸時代になると、瀬戸内から石材加工や石垣技術、造船技術の導入が図られたことが、石造物や古文書などに見える。中世から近世にかけては、四国や瀬戸内沿岸の各地から鶴見・米水津・蒲江地区へ移住した人々も少なくない。明治時代以降も東九州沿岸部との技術交流で伝えられた漁法や、四国・近畿で購入した漁具も多い。

山間部の農林産物は、市内に広がる番匠川水系を通じてその下流域に集約され、海岸部の海産物や加工品とともに、豊後水道と瀬戸内海を経て主に近畿へと移出された。これによる利益は大きく、江戸時代の佐伯藩の経済的・文化的発展の源泉となった。

このような産物の輸送や、近代以降に盛んになった出稼ぎによって、さまざまな地域との交流が生まれ、それに従事した人が新しい文化や芸能を伝えることもあった。豊後大野市などから山間部の各地に伝えられた芸能は、その一例である。

国際的なつながりによってもたらされた文化的要素も見逃せない。キリシタン関連の歴史文化資源は、岡藩領であった宇目地区に顕著だが、佐伯藩領にも伝承などが残り、中世から近世初期に海外からの信仰や文化が入ってきていたことを物語る。佐伯藩8代藩主 高標が収集した佐伯文庫も、中国からの書籍購入によって成立した歴史文化資源である。大坂や長崎まで家臣を派遣して購入し、海外の知識を積極的に取り入れていた。佐伯藩は文庫を藩士にも公開して学問を推奨し、江戸時代後期から近代にかけて、全国で活躍した優秀な人材を育成した。

一方、豊後と日向の国境に位置する佐伯は、しばしば争いの舞台ともなった。戦国時代末期の島津氏の豊後侵攻や豊臣秀吉の九州平定、明治時代初期の西南戦争では、日向道に沿った地域で戦闘が繰り広げられ、それを伝える史跡や伝承が残されている。

このように、本市には海上交通路と陸上交通路、それぞれを通じた広範囲の文化の交流があり、市域の内部外部ともに活発な交流があった。現在は大分県の南端にあり、山と海に囲まれた閉鎖的な地域と捉えられがちだが、歴史文化資源を紐解くと、佐伯は外に向かって開かれた地域であることが見えてくる。

第2節 関連歴史文化資源群

文化庁の『文化財保護法に基づく文化財保存活用大綱・文化財保存活用地域計画の作成等に関する指針』では、「地域の多種多様な文化財を歴史文化の特徴に基づくテーマやストーリーに沿って一定のまとまりとして捉えたもの」を「関連文化財群」と定義している。

地域計画の対象は、文化財だけでなくその周辺にある様々な「もの」や「こと」を含めた「歴史文化資源」である。そのため、指定・未指定に関わらず、それらを特定のテーマに沿った群として捉えることで、本市の歴史文化の価値や魅力をわかりやすく発信することができる歴史文化資源を、「関連歴史文化資源群」と位置付ける。

第1節では、本市の歴史文化の特徴を「海のさいき」「山のさいき」「人が集い活躍するさいき」「文化がつながり交わるさいき」の4つの視点から整理した。ここでは、これらの特徴に基づき、10のテーマに沿って関連歴史文化資源群を設定した。

表 3-1 本市の歴史文化の特徴と関連歴史文化資源群

関連歴史文化資源群	歴史文化の特徴			
	1 海のさいき	2 山のさいき	3 人が集い活躍するさいき	4 文化がつながり交わるさいき
①豊後水道が育む自然と伝統	◎			○
②地震・津波・水害の記憶と語り継がれる教訓	◎			
③豊予海峡の要衝 軍都佐伯	◎			
④祖母・傾山系が織りなす自然と大地の恵み		◎		○
⑤大野郡宇目郷と日向道		◎		
⑥豊後南部の雄 佐伯氏の栄華	○		◎	
⑦佐伯の殿様浦でもつ 佐伯藩と毛利家	○	○	◎	
⑧初代佐伯藩主 毛利高政	○		◎	
⑨文教のまち 佐伯と先哲			◎	○
⑩多彩な芸能・行事の多様なルーツ	○	○		◎

①豊後水道が育む自然と伝統

● ストーリー ●

本市の沿岸部は、リアス海岸特有の突出した半島と、その間にできる湾の連続からなり、各湾の奥に集落が営まれる。気候は温暖多雨が特徴で、人の手が及んでいない自然林が残っている。「大宮八幡神社の自然林」や、半島の急斜面にある「間越^{はざこ}のウバメガシと自然林」などは、各地区の環境を反映した自然林の代表である。「大島のアコウ林」や「沖黒島^{おきぐろしま}の自然林」のように、自然環境が保たれている島も少なくない。複雑な地形は独特の自然美を生み出し、「豊後二見ヶ浦」は海岸部の地形を象徴する景勝地であるとともに、年末の大しめ縄張替え行事が地域の行事として定着し、大きな観光効果も生んでいる。そこからほど近い「暁嵐^{ぎょうらん}の瀧」は、全国的にも珍しい、海岸からわずか500mに位置する滝である。この滝には江戸時代から多くの文化人が訪れ、その美しさを讃える詩を残している。

こうした豊かな自然とともに生活を営んできた人々は、数々の工夫を持ってその厳しい環境とも向き合ってきた。「田鶴音防風林」は潮風から集落を守るために自然林を利用した例の一つである。鶴見地区から蒲江地区で見られる、海に面した急斜面の耕作地を囲んだ長大な「シシ垣」も、リアス海岸の険しい地形に対応した技術の一つである。

さらに、豊富な漁業資源は現在でも佐伯の特色である。江戸時代の「温故知新録」や「佐伯藩政史料」には、藩政の初期から漁業や浦方（漁村）の保護施策がとられ、中には漁業資源のために山林を守る、魚付き保安林の保護のような、環境施策の先駆けと言える施策も記されている。こうして保護された海産物は、佐伯藩の財政の大きな柱の一つとなった。その代表は、鯛^{いわし}を加工した干鯛^{ほしか}である。佐伯藩の特産品として関西に移出され、質の良さが評判を呼んだ。「蒲江の漁撈用具」は、多様で豊富な海産資源を利用するために培われた、技術と工夫の結晶といえる。また明治時代に豊後水道の中央に建造された「水ノ子島灯台」は、現在も海上交通の安全を見守り続けている。

このように自然や漁業資源に恵まれた沿岸部では、浦ごとに集落が展開し、それぞれで多彩な芸能・行事が息づいている。

そして、これらの歴史文化資源は、本市沿岸部の自然環境と、人々の暮らしや文化が海とともに紡がれてきたことを示している。

表 3-2 「豊後水道が育む自然と伝統」の構成歴史文化資源

名称	分類	指定
豊後水道海事博物館（旧水ノ子島灯台吏員退息所）	有形（建造物）	国登録
渡り鳥館（旧水ノ子島灯台吏員退息所物置所）	有形（建造物）	国登録
豊後水道海事博物館堀（旧水ノ子島灯台吏員退息所堀）	有形（建造物）	国登録
水ノ子島灯台	有形（建造物）	未指定
羽出浦天満社絵馬と天井絵	有形（絵画）	市指定
温故知新録	有形（古文書）	未指定
佐伯藩政史料	有形（歴史資料）	未指定
蒲江の漁撈用具	有形の民俗文化財・重要	国指定
鯨の墓	有形の民俗文化財	市指定
シシ垣	有形の民俗文化財	未指定
早吸日女神社八人太鼓 附獅子舞	無形の民俗文化財	県指定
暁嵐の瀧	名勝	市指定
豊後二見ヶ浦	名勝	市指定
宇土崎洞門	名勝	市指定
洲崎	名勝	市指定
暁嵐の滝岩上植物群落	天然記念物	県指定
最勝海浦のウバメガシ林	天然記念物	県指定
大島のアコウ林	天然記念物	県指定
竹野浦のビロウ	天然記念物	県指定
沖黒島の自然林	天然記念物	県指定
横島のビャクシン自生地	天然記念物	県指定
間越のウバメガシと自然林	天然記念物	県指定
蒲江カズラ	天然記念物	県指定
大宮八幡神社の自然林	天然記念物	市指定
東林庵のアコウ	天然記念物	市指定
田鶴音防風林	天然記念物	市指定
河内田のアコウ	天然記念物	市指定
洲の鼻の海浜植物群落	天然記念物	市指定
弁天島天満社々叢	天然記念物	市指定
米水津地域コミュニティセンター収蔵資料	有形の民俗文化財ほか	未指定

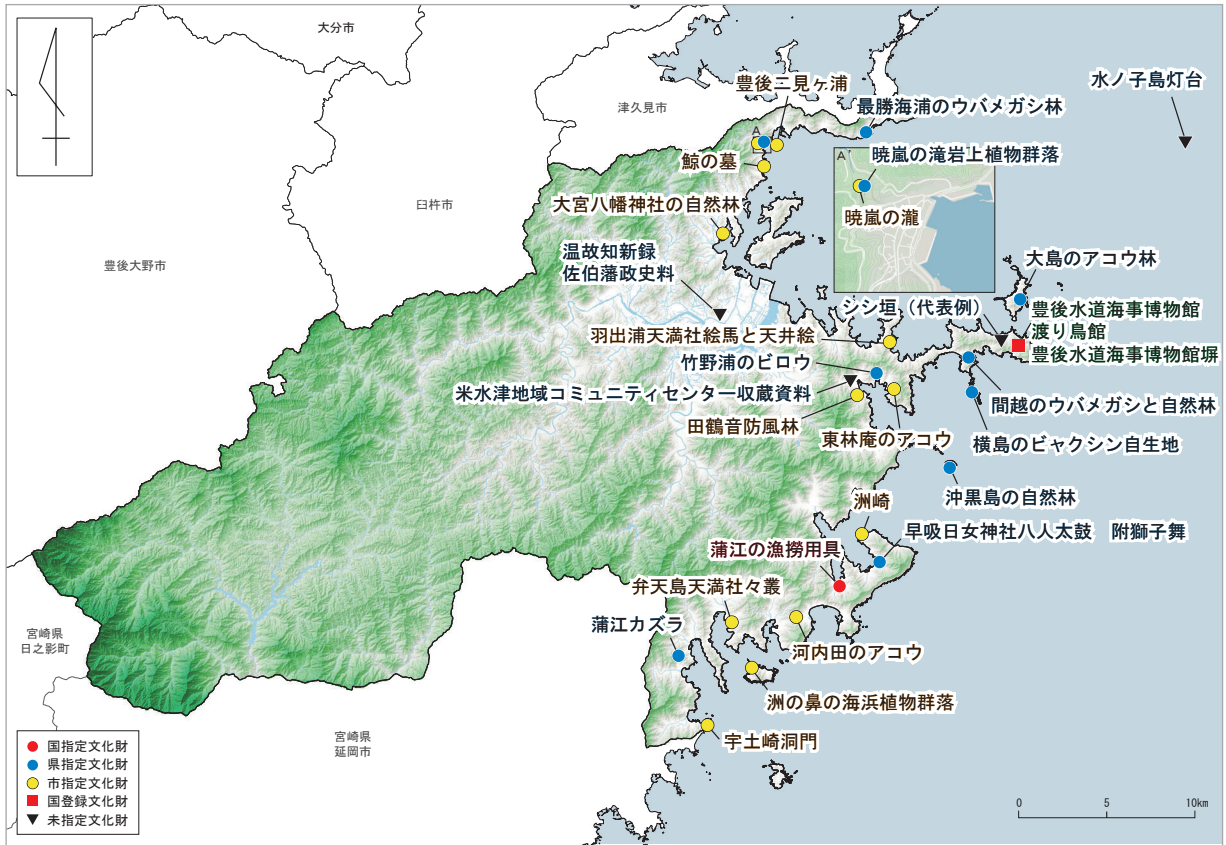


図 3-2 「豊後水道が育む自然と伝統」の構成歴史文化資源分布図

②地震・津波・水害の記憶と語り継がれる教訓

● ストーリー ●

豊後水道・日向灘に面する本市は、古くから地震と津波にたびたび襲われていたことが、様々な資料からわかっている。

米水津地区の「龍神池」は海岸に近い潟湖で、3,300年前からの津波堆積物が確認されて、地震研究上の重要な資料となっている。

宝永4年（1707）に発生した大地震については、本市内の各地に詳細な記録や伝承が残っている。特に沿岸部の米水津地区浦代浦は11mの津波に襲われ、養福寺の石段が上2段だけを残して津波にのまれたと「成松文書」は伝えている。佐伯藩の「温故知新録」によると、この時佐伯藩は地震後に津波の到来を予想し、いち早く家臣や町人に高台への避難を指示し、高台にある城内への立ち入りも許可した。また地震・津波後の対策として城下町を囲む大土手（堤防）を建設した。安政元年（1854）の大地震では、こうした対策や教訓が生かされ、佐伯藩では被害を最小限にとどめることに成功しており、江戸時代の災害対策として注目されている。

さらに、台風や大雨による水害にも悩まされてきた。「温故知新録」には、佐伯の城下町が、番匠川の氾濫に幾度も襲われてきたことが記されている。中・上流域の集落でも氾濫や地滑りがしばしば起こり、堤防や護岸の手入れを欠かさなかった。近代以降では昭和18年（1943）の台風による被害が大きく、現在の番匠川河口付近の形は、これを機に行われた河川改修によるものである。

このように、人々は海や川からもたらされる恵みとともに、その恐ろしさにも向き合ってきた。今後発生が予想される南海トラフ地震や、例年の台風などへの対策として、佐伯の歴史文化資源は重要な教訓を物語っている。

表 3-3 「地震・津波・水害の記憶と語り継がれる教訓」の構成歴史文化資源

名称	分類	指定
御城下分見明細図絵	有形（古文書）	市指定
成松文書	有形（古文書）	市指定
温故知新録	有形（古文書）	未指定
御城并御城下絵図	有形（古文書）	未指定
佐伯藩政史料	有形（歴史資料）	未指定
佐伯城下町（馬場の土手）	史跡	未指定
龍神池	天然記念物	未指定

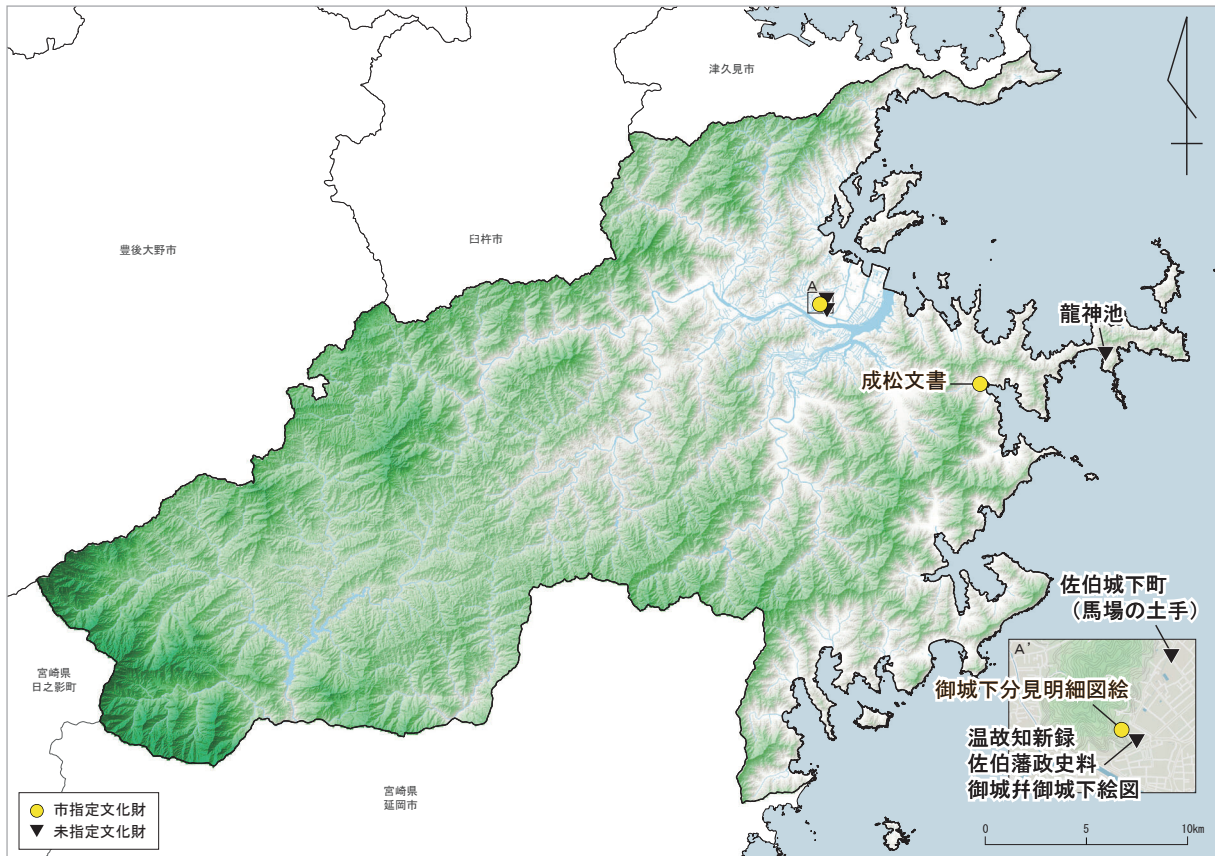


図 3-3 「地震・津波・水害の記憶と語り継がれる教訓」の構成歴史文化資源分布図

③豊予海峡の要衝 軍都佐伯

● ストーリー ●

豊後水道は太平洋と瀬戸内海の玄関口である。この地理的条件から軍事的な要衝として注目され、大正時代には豊予要塞として豊後水道沿岸部の各地には軍事施設が整備された。市内では伊予方面に突出する鶴見半島に「丹賀砲台」、「鶴御崎砲台」が整備され、日本防衛の拠点となった。また佐伯湾は、明治時代末頃から日向灘沖で行われた、海軍の演習の停泊地などとして頻りに利用された。大入島の「大正天皇駐蹕記念碑」は、明治44年(1911)に佐伯湾で行われた大演習を東宮(後の大正天皇)が見学したことを記念したものである。

昭和9年(1934)、佐伯湾に面した干潟を埋め立てて佐伯海軍航空隊が、次いで昭和14年(1939)に佐伯防備隊が開隊し、沿岸部の複雑な地形を利用した軍事演習が行われた。これらの海軍基地の建設を契機として、佐伯の市街地は上水道敷設などのインフラ整備が進み、軍人家族の転入に伴い人口が急激に増加した。それに対応するため、農地だったところに民家が建ち並び、市街地に小学校が一新設されるなど、軍事都市として発展した。さらに当時の佐伯町と周辺5村の2度にわたる合併を経て、昭和16年(1941)の市制施行により佐伯市が誕生した。

昭和16年の太平洋戦争開戦に際しては、ハワイの真珠湾攻撃に参加するため、佐伯湾から発進した連合艦隊機動部隊が攻撃に加わった。しかし開戦後の戦局は次第に悪化し、昭和20年(1945)3月以降は海軍基地を標的とした空襲を受け、佐伯の市街地にも大きな被害が出た。軍関係のみならず民間の犠牲者も多く、当時の悲惨な記憶も語り継がれている。

本市の各地に残る軍事施設の跡や、戦争被害を伝える歴史文化資源は、本市の近代化が進んだきっかけとその背景を示す一方で、戦争の悲惨さと平和の大切さを訴えている。

表 3-4 「豊予海峡の要衝 軍都佐伯」の構成歴史文化資源

名称	分類	指定
旧佐伯海軍航空隊掩体壕	有形（建造物）	国登録
大正天皇駐蹕記念碑	有形（建造物）	未指定
丹賀砲台跡	史跡	市指定
仙崎砲台跡	史跡	市指定
鶴御崎砲台跡	史跡	未指定
濃霞山戦争遺跡	史跡	未指定
長島山戦争遺跡	史跡	未指定
興人敷地内戦争遺跡	史跡	未指定
女島山古墳群（戦争遺構）	史跡	未指定

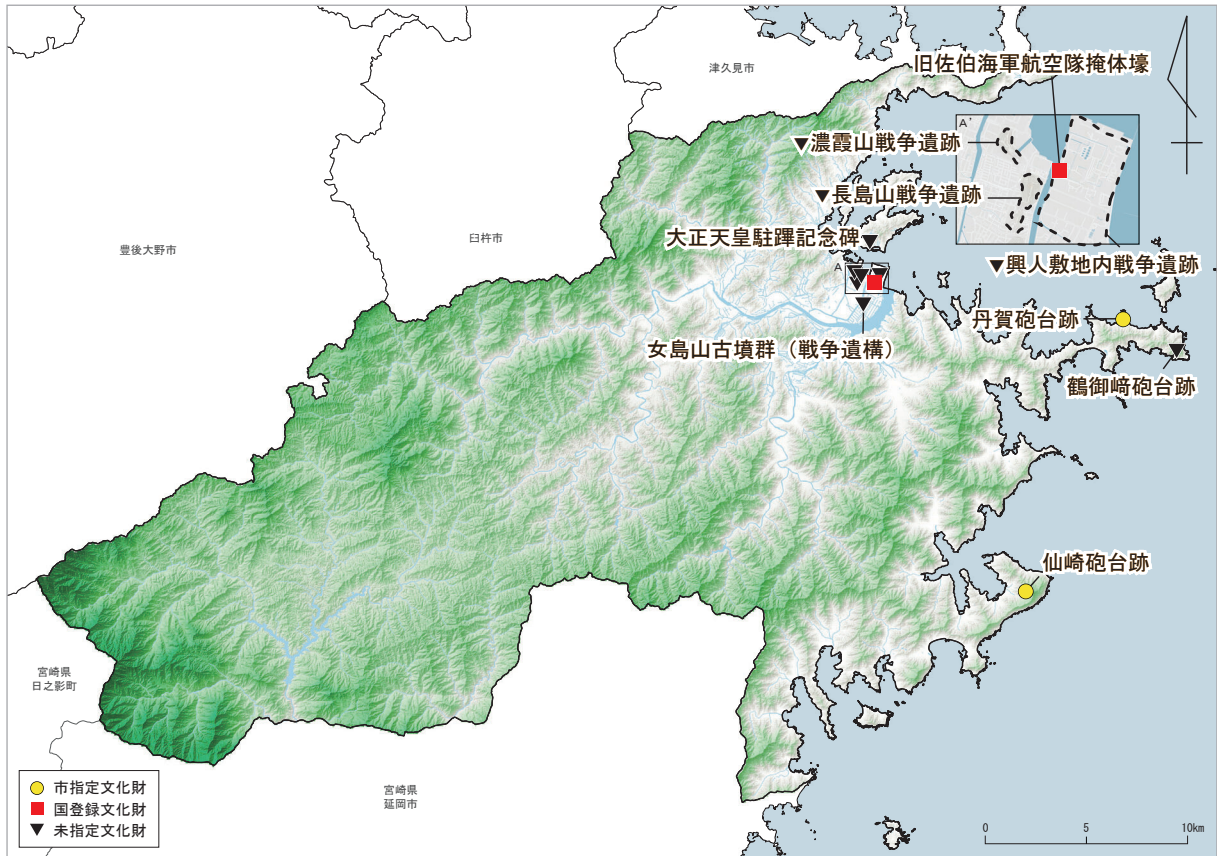


図 3-4 「豊予海峡の要衝 軍都佐伯」の構成歴史文化資源分布図

④祖母・傾山系が織りなす自然と大地の恵み

● ストーリー ●

本市の内陸部では、祖母・傾山系に連なる急峻な山々が続き、海岸部と比較して年間の平均気温が3℃近く低く、植生も異なる。宇目地区の「鷹鳥屋山の自然林」は、山間地域の植生の特徴を表すものとして貴重である。

また市内を東西に貫く番匠川は本匠地区に源を発し、多くの中小河川と合流して佐伯湾に注いでいる。市域の地質は砂岩・泥岩を主とするが、本匠地区を中心に石灰岩層が分布し、中には中生代の貝化石や「小半鍾乳洞」のような大地の形成過程を示す記念物が見られる。また、9万年前の阿蘇山噴火時の火砕流が形成した凝灰岩層が山間部に点在し、石造物などに利用された。これらの地質は多くの河川によって侵食され、「藤河内溪谷」や「銚子八景」などの特徴のある景観を造り出している。

人々の生活はこれらの美しい自然の中で生まれ、江戸時代以降は森林資源を利用した炭焼きや木材加工のほか、製茶業や製紙業、シイタケ栽培が盛んに生まれ、現在も茶やシイタケは本市の特産品として定着している。中でも宇目地区では、岡藩の経済を支え、平成11年（1999）まで採掘が継続した「木浦鉱山」や、木地師と呼ばれる木工職人が活動したことも伝えられている。直川地区では身近な名木が指定文化財となっており、生活の中で自然に親しまれてきたことがうかがえる。

自然と人間社会の共生はユネスコエコパークにおいても評価され、保全と持続可能な発展が期待されている。

表 3-5 「祖母・傾山系が織りなす自然と大地の恵み」の構成歴史文化資源

名称	分類	指定
大師庵宝塔	有形（建造物）	県指定
宇藤木橋	有形（建造物）	市指定
猿谷の石風呂	有形（建造物）	市指定
塩見大師庵延命地蔵	有形（建造物）	市指定
小椋家資料	有形（古文書）	未指定
佐伯藩政史料	有形（歴史資料）	未指定
磨崖石塔	史跡	県指定
上小倉横穴古墳群	史跡	市指定
聖嶽洞穴	史跡	市指定
三国峠	史跡	市指定
田野磨崖仏	史跡	市指定
木浦千人間歩	史跡	市指定
藤河内溪谷	名勝	県指定
銚子八景	名勝	市指定
蓮光寺湧水	名勝	市指定
カモシカ	天然記念物・特別	国指定
小半鍾乳洞	天然記念物	国指定
宇目の野生桐	天然記念物	県指定
鷹鳥屋山の自然林	天然記念物	県指定
ハウライクジャク	天然記念物	市指定
蝙蝠穴	天然記念物	市指定
本匠の埋没樹木	天然記念物	未指定
メガロドン化石	天然記念物	未指定
ソボサンショウウオ	天然記念物	未指定
本匠郷土資料館収蔵資料	有形の民俗文化財ほか	未指定
直川農業歴史館収蔵資料	有形の民俗文化財ほか	未指定

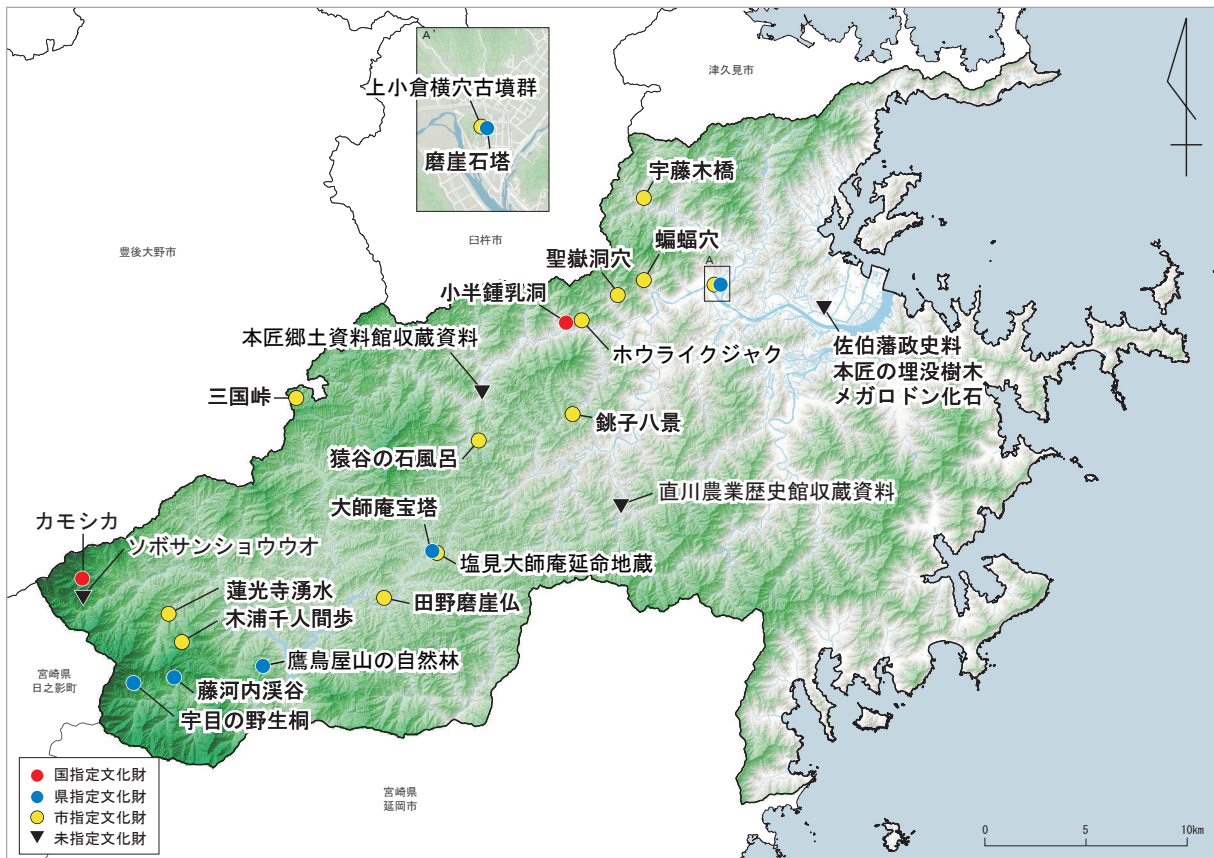


図 3-5 「祖母・傾山系が織りなす自然と大地の恵み」の構成歴史文化資源分布図

⑤大野郡宇目郷と日向道

● ストーリー ●

古代に律令国家が全国に巡らせた官道は、豊後国府こくふから宇目地区おのいち小野市を經由し、日向へ通じていたと推定される。中世から近世にかけては、豊後と日向を結ぶ大動脈に発展して「日向道ひゅうがみち」と呼ばれた。険しく難所が多かったが、「三国峠みくにとうげ」などの景勝地もあり、様々な目的・背景のもと、多くの人や物が行き交った。

この街道が南北に通る宇目地区は、奈良時代の大野郡三重郷の一部にあたり、豊後南部の山間部からの影響を強く受ける地域であった。中世では豊後南部の国境を守る地域として重視され、佐伯氏や大友氏重臣の志賀氏しがの影響のもと、数多くの山城が築かれた。天正14年（1586）に始まる島津氏の豊後侵攻や、その後の豊臣秀吉の九州平定では、行軍路となった日向道沿いの各所で戦闘が行われた。

江戸時代になると、宇目地区は岡藩の領地となった。「木浦鉦山」の経営や林業は岡藩の重要な収入源となり、シイタケ栽培も盛んに行われるようになったほか、水ヶ谷では窯業が行われ、木地師きじしの活動も伝えられている。「宇目の唄げんか」は、木浦鉦山で働く家に子守奉公に来た娘達が歌った子守唄として知られている。

また、宇目地区はキリシタン関連の歴史文化資源が良く残されていることも大きな特徴で、中世から近世初頭にキリスト教信仰が盛んであった、岡藩周辺地域からの影響を見ることができる。

明治10年（1877）の西南戦争では、日向道が西郷軍と政府軍双方の行軍路となった。本市も戦場となり、宇目地区・本匠地区・直川地区・蒲江地区の主要街道に沿った尾根には多くの台場ざんごう（塹壕）が築かれた。特に宇目地区には両軍が築いた台場群が非常に多く、日向道が通るこの地の重要性和、戦闘の激しさを伝えている。

このように、宇目地区と日向道は時代の転換点において重要な役割を果たし、海上交通を基盤とする沿岸部とは異なる歴史文化を生み出す背景となってきた。

表 3-6 「大野郡宇目郷と日向道」の構成歴史文化資源

名称	分類	指定
小椋家資料	有形（古文書）	未指定
切支丹柄鏡	有形の民俗文化財	県指定
墨つけ祭り	無形の民俗文化財	市指定
宇目の唄げんか	無形の民俗文化財	未指定
重岡キリシタン墓	史跡	県指定
三国峠	史跡	市指定
木浦千人間歩	史跡	市指定
木浦女郎の墓	史跡	市指定
朝日嶽城跡	史跡	市指定
蔵小野砦跡	史跡	市指定
キリシタン不動	史跡	市指定
西南戦役古戦場陸地峠	史跡	市指定
西南の役津島畑古戦場	史跡	市指定
日向道	史跡	未指定
西南戦争台場群	史跡	未指定
宇目地域コミュニティセンター収蔵資料	有形の民俗文化財ほか	未指定

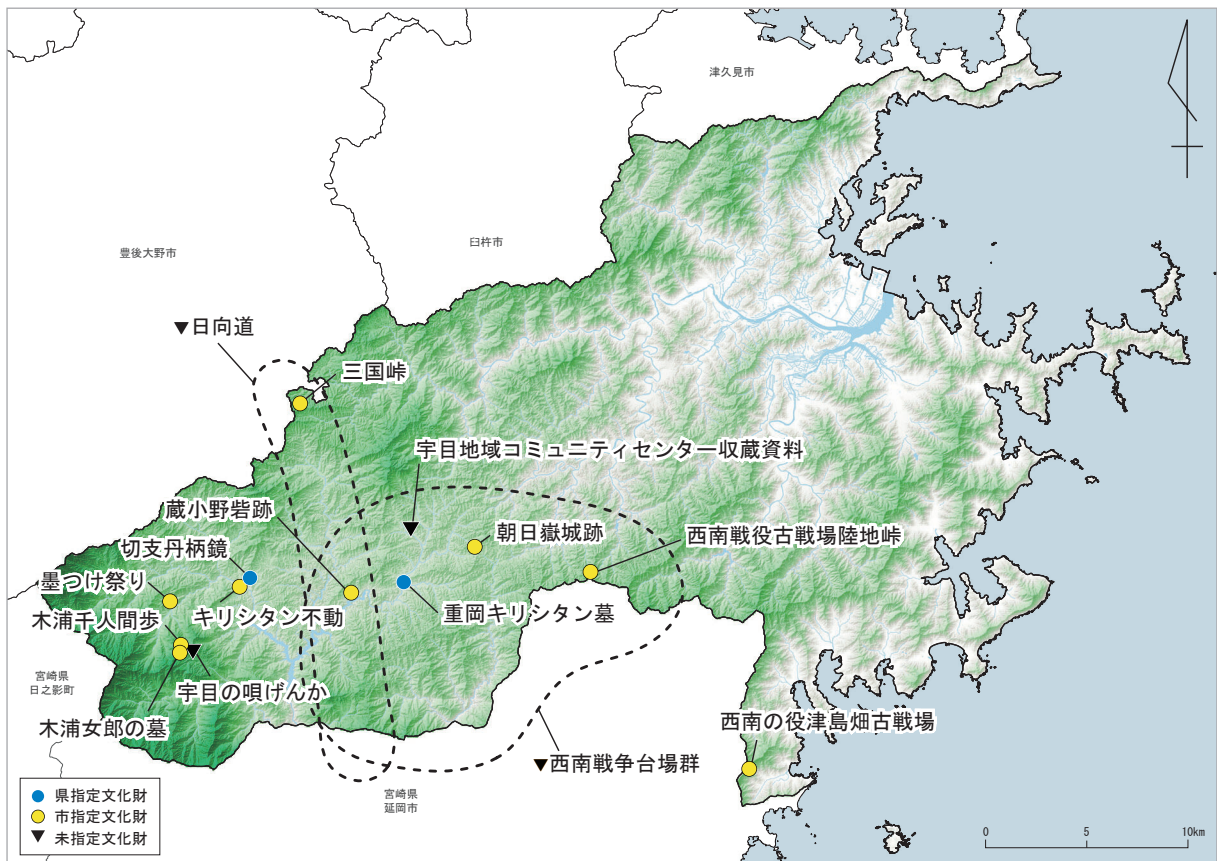


図 3-6 「大野郡宇目郷と日向道」の構成歴史文化資源分布図

⑥豊後南部の雄 佐伯氏の栄華

● ストーリー ●

佐伯氏は、中世の佐伯を支配した一族である。豊後水道から日向灘にかけての九州東岸の水上交通を支配し、豊後南部に大きな勢力を築きあげていたと考えられる。豊後守護 大友氏に服属する立場にありながら、時には幕府から直接の接触を受けて直属の小番衆となることもあった。大友氏も年中行事などで佐伯氏に特別な対応をとっており、日向との国境で大きな力を持つ佐伯氏の一族は、大友家臣団の中でも特殊なものであった。

彼らが拠点とした佐伯地区上岡や弥生地区には、平安時代末の作と見られる「木造阿弥陀如来坐像及び観音・勢至菩薩立像」、鎌倉時代の佐伯氏一族の供養塔と伝わる「十三重塔」、鎌倉時代末から南北朝時代に凝灰岩の崖面に彫られた「磨崖石塔」、戦国時代に築かれた大規模な居城「樽牟礼城跡」など、この時代を代表する歴史文化資源が残されている。また、この拠点から離れた周辺部にも山城、寺院跡や中世石造物が点在し、佐伯氏の盛衰を今日に伝えている。

16世紀前半に活躍した佐伯惟治これはは、主家である大友氏と樽牟礼城で戦い、敗戦後に日向方面へと逃亡し、討たれた。死後に祟りをなしたことが近世の「樽牟礼実録」や「大友興廢記」に伝えられ、本市の各地には惟治の怨霊を静めるために創建された神社が残されている。惟治の活動や死後の祟りに関する伝承は、本市内から宮崎県延岡市北部にまで広く遺り、佐伯氏の影響範囲の広さを示している。宇目地区の「千束楽」の由来にも惟治家臣の逃亡を模したとする説があり、惟治が広く知られていることがわかる。

惟治の後も、大友氏の重臣となった佐伯惟教これのりや、島津氏の豊後侵攻に際して佐伯を防衛した佐伯惟定これさだの活躍が良く知られている。彼らの事績を伝える文献史料は乏しいが、「盛嶽文書」は、一時期四国へと渡っていた惟教が、直川地区に残った家臣と連絡を取り合っていたことを示しており、豊後水道をまたいだ活動がうかがえる。

佐伯氏一族は、文禄2年(1593)にこの地を離れることとなるが、およそ400年間に及ぶ佐伯氏の繁栄は、数々の歴史文化資源が物語っている。

表 3-7 「豊後南部の雄 佐伯氏の栄華」の構成歴史文化資源

名称	分類	指定
十三重塔	有形（建造物）	県指定
神内釈迦堂石幢（通称笠地藏）	有形（建造物）	市指定
木ノ原古戦場千人塚	有形（建造物）	市指定
西野のお塔	有形（建造物）	未指定
門前石塔群	有形（建造物）	未指定
木造阿弥陀如来坐像及び観音・勢至菩薩立像	有形（彫刻）	県指定
常楽寺鰐口	有形（工芸品）	県指定
盛嶽文書	有形（古文書）	市指定
御手洗家文書	有形（古文書）	市指定
梶牟礼実録	有形（典籍）	未指定
大友興廃記	有形（典籍）	未指定
蔵骨器	有形（考古資料）	県指定
神踊・杖踊	無形の民俗文化財	県指定
千束楽	無形の民俗文化財	県指定
磨崖石塔	史跡	県指定
梶牟礼城跡	史跡	市指定
因尾砦跡	史跡	市指定
柳井館跡	史跡	市指定
用來城址	史跡	市指定
梶牟礼遺跡	史跡	未指定
古市遺跡	史跡	未指定
八幡山城跡	史跡	未指定
木戸城	史跡	未指定
曳地館	史跡	未指定
小田山城跡	史跡	未指定

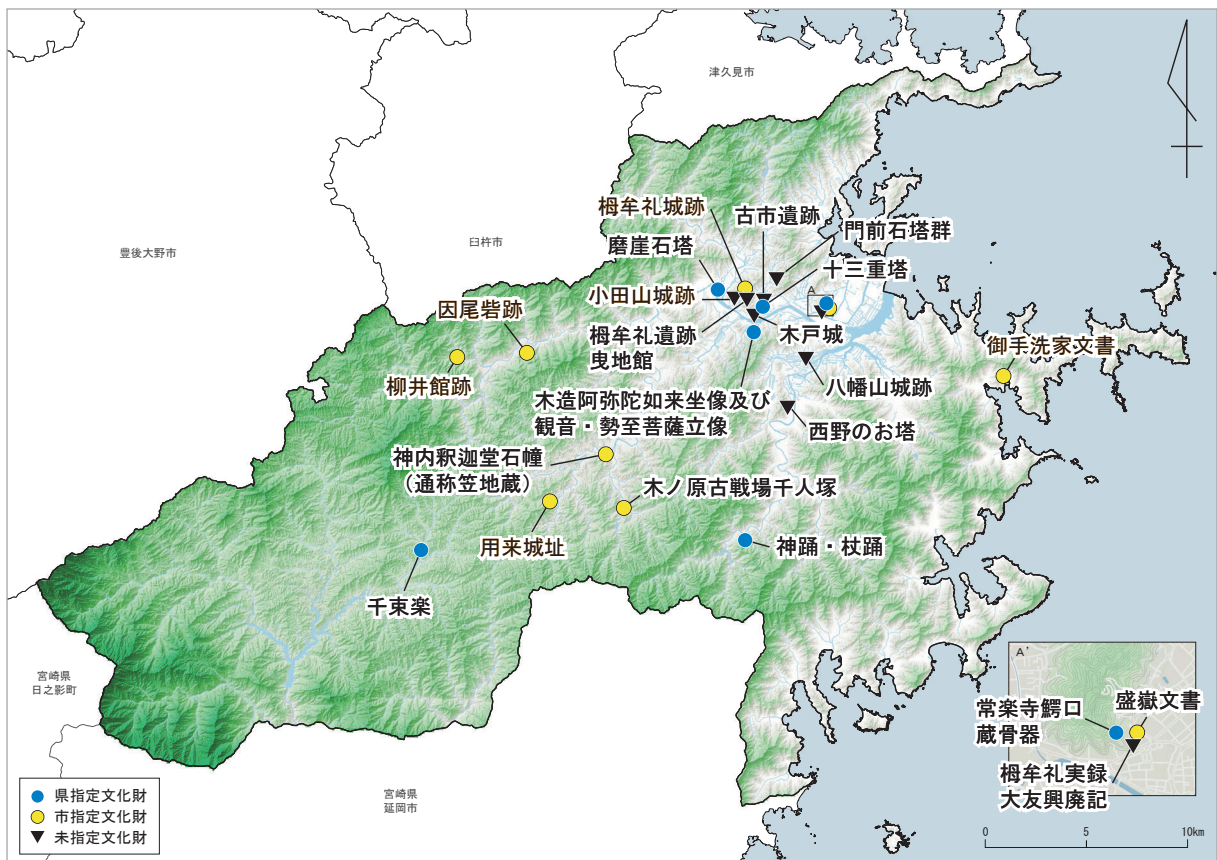


図 3-7 「豊後南部の雄 佐伯氏の栄華」の構成歴史文化資源分布図

⑦佐伯の殿様浦でもつ 佐伯藩と毛利家

● ストーリー ●

江戸時代は本市域の大半が佐伯藩2万石に属し、一貫して毛利家が統治した。比較的安定した藩政の結果、豊かで質の良い歴史文化資源が今日まで残されている。

小藩ながら、豊富な海産資源や干鰯に代表される加工品、さらに漁業・海上交通にかかる税収が藩の財政を潤した。海岸部からの恵みを最大限に利用し、石高以上の経済力を持つに至った佐伯藩毛利家は、いつしか「佐伯の殿様浦でもつ」と謳われた。江戸中期から末期に至る「佐伯藩政史料」や、それらを編集した「温故知新録」からは、こうした藩の歴史を間断なくたどることができる。

毛利家所用の武具や調度品、古文書などの資料群は、「毛利家資料」として伝来し、佐伯藩の成立や歴代藩主の生活をうかがい知ることができる。養賢寺にある歴代藩主の墓所には巨大で質の良い五輪塔が立ち並び、その実力がしのばれる。

初代藩主である毛利高政が築城し、江戸時代を通じて藩政の拠点となった「佐伯城」は、近年の調査で築城初期から山頂の城郭と麓の三の丸（居館）という構造であったことが判明し、中世以来の山城の構造を踏襲した近世城郭として評価される。さらに山城の維持管理に関わる遺構が良く残り、その裏付けとなる「温故知新録」や「佐伯藩政史料」からは、築堤や港湾建設に用いる石垣技術を瀬戸内から導入した災害復旧のあり方や、領民の協力のもとで維持されてきたことがうかがえる貴重な城跡である。

佐伯城の麓に広がる湿地を埋め立てて形成された「佐伯城下町」は、番匠川とその支流を堀と水路として構成要素に取り込んでいる。城下に5箇所設けられた船着き場からは、番匠川・豊後水道に直接出ることができ、川や海と深く結びついた城下町であることがわかる。また、町割に基づいて住居と施設が配置され、現在の市街地の基礎をなし、今も道路や地名、寺院などにその名残を見ることができる。

このほか、佐伯藩領内には歴代藩主の事績や藩政に関わる歴史文化資源が、各地の寺社や庄屋家に受け継がれ、毛利家の治世を伝えている。

表 3-8 「佐伯の殿様浦でもつ 佐伯藩と毛利家」の構成歴史文化資源

名称	分類	指定
佐伯城三ノ丸櫓門	有形（建造物）	県指定
旧坂本家住宅	有形（建造物）	市指定
毛利家御居間	有形（建造物）	市指定
三府御門	有形（建造物）	市指定
標柱「是從東佐伯領」	有形（建造物）	市指定
毛利家墓所石塔群	有形（建造物）	未指定
御城下分見明細図絵	有形（古文書）	市指定
毛利高政書状	有形（古文書）	市指定
赤木村大庄屋の御用日記	有形（古文書）	市指定
楠本の庄屋古文書	有形（古文書）	市指定
温故知新録	有形（古文書）	未指定
御城并御城下絵図	有形（古文書）	未指定
高標書「山号額」	有形（書跡）	市指定
佐伯文庫	有形（典籍）	未指定
毛利家資料	有形（歴史資料）	未指定
佐伯藩政史料	有形（歴史資料）	未指定
佐伯城跡	史跡	国指定
佐伯城下町	史跡	未指定
船頭町の大楠	天然記念物	未指定

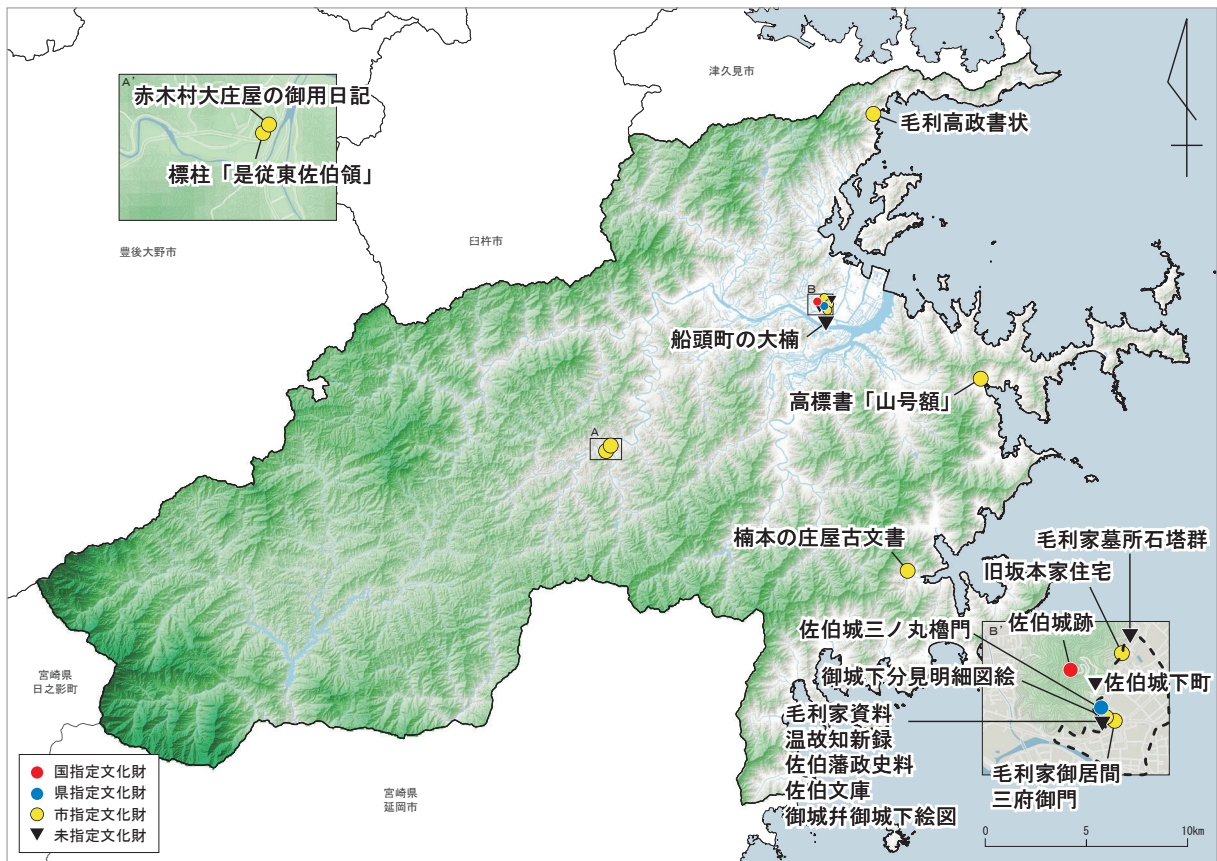


図 3-8 「佐伯の殿様浦でもつ 佐伯藩と毛利家」の構成歴史文化資源分布図

⑧初代佐伯藩主 毛利高政

● ストーリー ●

佐伯藩政の基礎を整えた初代藩主 毛利高政の事績は、主に「毛利家資料」に含まれる文書群が物語っている。尾張国（現在の愛知県）の出身とされ、はじめは森姓を名乗って豊臣秀吉の側近となり、主に後方支援業務を担って頭角を現した。天正10年（1582）の本能寺の変の際に、人質として預けられた中国地方の大名 毛利輝元てるもとに人柄を気に入られ、輝元てるもとの勧めで毛利姓に改めたと伝えられる。文禄・慶長の役では舟奉行や目付めつけとして従軍し、秀吉から奮戦を讃えられることもあった。関ヶ原合戦の後、慶長6年（1601）に佐伯を与えられ、高政は初代藩主として入部した。

藩政の拠点として築いた「佐伯城」は、江戸時代には珍しい山城で、高政による縄張りが良く残る。北西斜面に設けられた雄池・雌池おんいけ めんいけは雨水の調整機能があったと想定され、土木や治山に関する知識と技術を持っていたことが分かる。城とともに整備された「佐伯城下町」は、番匠川とその支流を巧みに取り込み、佐伯藩を支える水運の要となった。領民に向けては、日々の暮らしや作業について具体的かつ詳細に指示し、定住化と生活の安定を図っている。特に漁場近くの森林伐採の禁止は、現代の魚付き保安林に通じ、庶民の生活だけでなく、資源管理にも精通していたことを示している。佐伯の漁業資源や水上交通の重要性に入部直後から注目した高政の施策によって、佐伯藩の藩政は安定し、後の経済的発展の基礎となった。

また高政は鉄砲の名手で、徳川家康をはじめとする有力大名とも交流を持っていた。津田流砲術を修めて伊勢守流いせのかみを創始し、家臣へ伝授したほか、他藩から請われて教授したこともある。「毛利家資料」に伝わるおよそ3mに及ぶ巨大な大鉄砲は、高政が使用したことが記録に裏付けられる戦国時代の大鉄砲として、極めて貴重である。

このような歴史文化資源からは、多方面に深い知識と技術を持ち、佐伯の地理や自然環境を的確に捉えた藩政を行い、諸大名から信頼を寄せられた、政治家としての毛利高政が見えてくる。高政にまつわる逸話も多く伝えられ、現在の本市の基礎を形作った人物として、慕われ続けている。

表 3-9 「初代佐伯藩主 毛利高政」の構成歴史文化資源

名称	分類	指定
毛利家墓所石塔群	有形（建造物）	未指定
毛利高政書状	有形（古文書）	市指定
温故知新録	有形（古文書）	未指定
毛利家資料	有形（歴史資料）	未指定
佐伯藩政史料	有形（歴史資料）	未指定
佐伯城跡	史跡	国指定
佐伯城下町	史跡	未指定

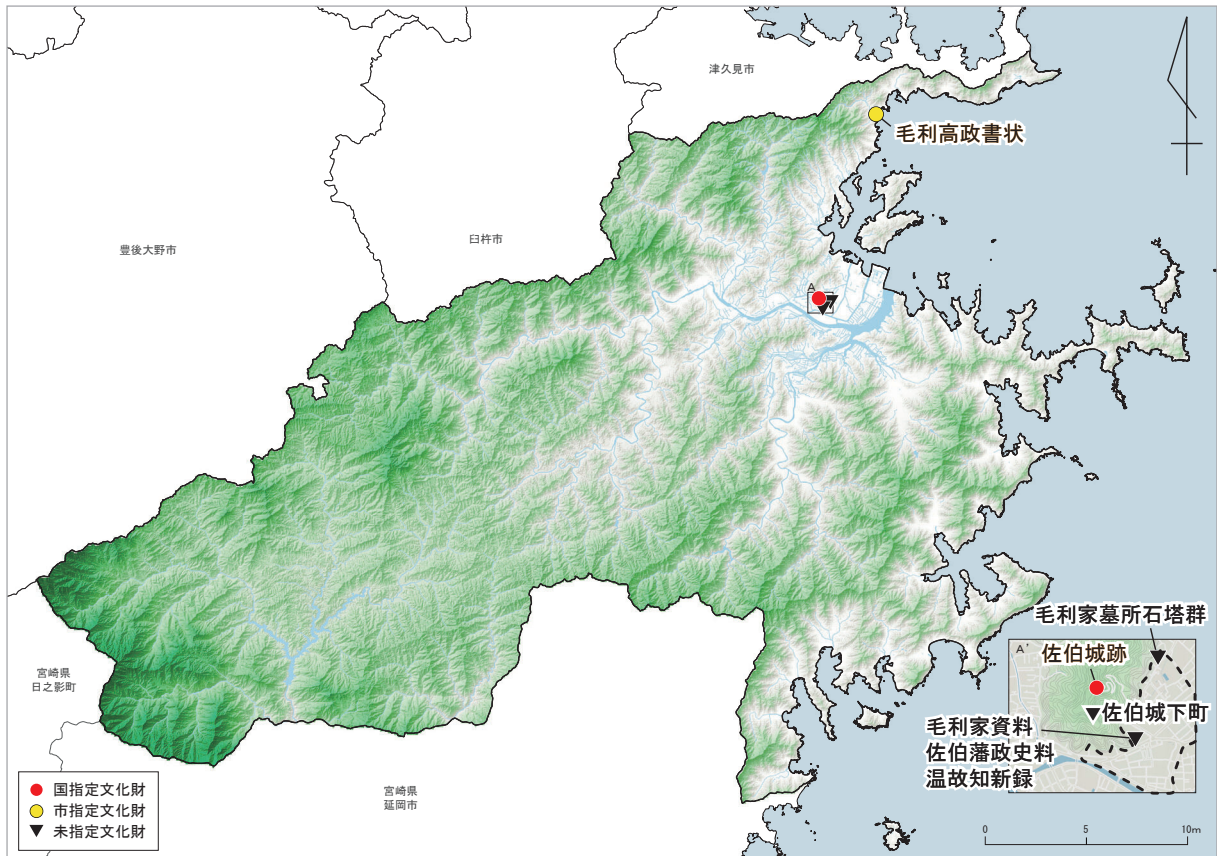


図 3-9 「初代佐伯藩主 毛利高政」の構成歴史文化資源分布図

⑨文教のまち 佐伯と先哲

● ストーリー ●

佐伯藩8代藩主 毛利高標は幼少期から学問を好み、学者大名として名高い。「佐伯文庫」は、高標が収集した書籍の一大コレクションである。高標自らが選書し、中国から輸入した漢籍を中心とする幅広く質の高い書籍群で、中には珍しい洋書や、輸入が禁止されていたキリスト教に関する書籍、現在では世界でも佐伯文庫にしか残っていない書籍もある。その数は8万巻（4万冊）にのぼったといわれる。のちに10代藩主 高翰たかなかが幕府の求めに応じて一部を献上し、その返礼とされる鞍くらと鐙あぶみが「毛利家資料」に伝わっている。献上された書籍は幕府の図書館である紅葉山文庫などに納められ、江戸時代後期から近代にかけて政治や学問の基礎資料となって日本を支えた。一方で、佐伯に残された書籍には散逸したものも多いが、今なお約3,000冊が伝来している。

また、高標は安永6年（1777）に藩校 四教堂を開設し、漢学・和学・医学・兵学に加えて武術も教えて文教施策に力を入れたことでも知られる。教授陣には廣瀬淡窓ひろせたんそうの師であった漢学者 松下筑陰ちくいんや、淡窓に学び頼山陽らいさんように才能を称された漢学者の中島子玉なかしましぎよく、同じく淡窓などから学んだ秋月橋門きつもんのような、一流の知識人を藩外からも招いて指導にあたらせた。

四教堂からは多くの優秀な人材が世に送り出され、その代表と言える人物が矢野龍溪りゅうけいである。明治維新後の東京で、同郷の藤田茂吉と郵便報知新聞で筆をとり、のちに福沢諭吉を介して大隈重信とともに、立憲政治の確立に尽力した。さらに『浮城物語』や『経国美談』といった政治小説を著し、近代の政治家・ジャーナリスト・小説家として日本の政治の近代化と民主化に大きく貢献した。のちに文豪として名声を得る国木田独歩くにきだどっぽに、教師として佐伯に赴任するよう勧めたのも龍溪である。

矢野龍溪の活躍に影響を受けた佐藤蔵太郎（鶴谷）かくこくは、大分県内で新聞記者のかたわら郷土史研究も手がけ、帰郷してからは精力的に町村史や文献資料の編さん・出版などに携わった、県下の郷土史研究者の草分けと言える。

そのほかにも、江戸時代中期に弥生地区の灌漑水路を整備して農村の生活を安定させた小林九左衛門くざえもん、江戸時代後期に水不足で困っていた城下の庶民のために、私財を投じて3つの井戸を掘った藩医の今泉元甫げんぼ、明治時代から大正時代にかけて毛利式速記術を創始し、財団を創設して故郷佐伯に尽くした旧藩主家の毛利高範たかのりなど、佐伯には多くの個性的な先哲が生まれた。

彼らの功績は様々な歴史文化資源や逸話として伝わり、今なお敬慕されている。

表 3-10 「文教のまち 佐伯と先哲」の構成歴史文化資源

名称	分類	指定
旧坂本家住宅	有形（建造物）	市指定
小林九左衛門の廟	有形（建造物）	市指定
金馬橋碑	有形（建造物）	市指定
小林九左衛門の佩刀	有形（工芸品）	市指定
温故知新録	有形（古文書）	未指定
矢野龍溪自筆書幅	有形（書跡）	市指定
佐伯文庫	有形（典籍）	未指定
毛利家資料	有形（歴史資料）	未指定
佐藤蔵太郎旧蔵資料	有形（歴史資料）	未指定
明石秋室関係資料	有形（歴史資料）	未指定
中島子玉関係資料	有形（歴史資料）	未指定
矢野龍溪関係資料	有形（歴史資料）	未指定
毛利高範関係資料	有形（歴史資料）	未指定
秋月橘門関係資料	有形（歴史資料）	未指定
矢野龍溪書状	有形（歴史資料）	未指定
安井	史跡	市指定
中島子玉墓	史跡	市指定

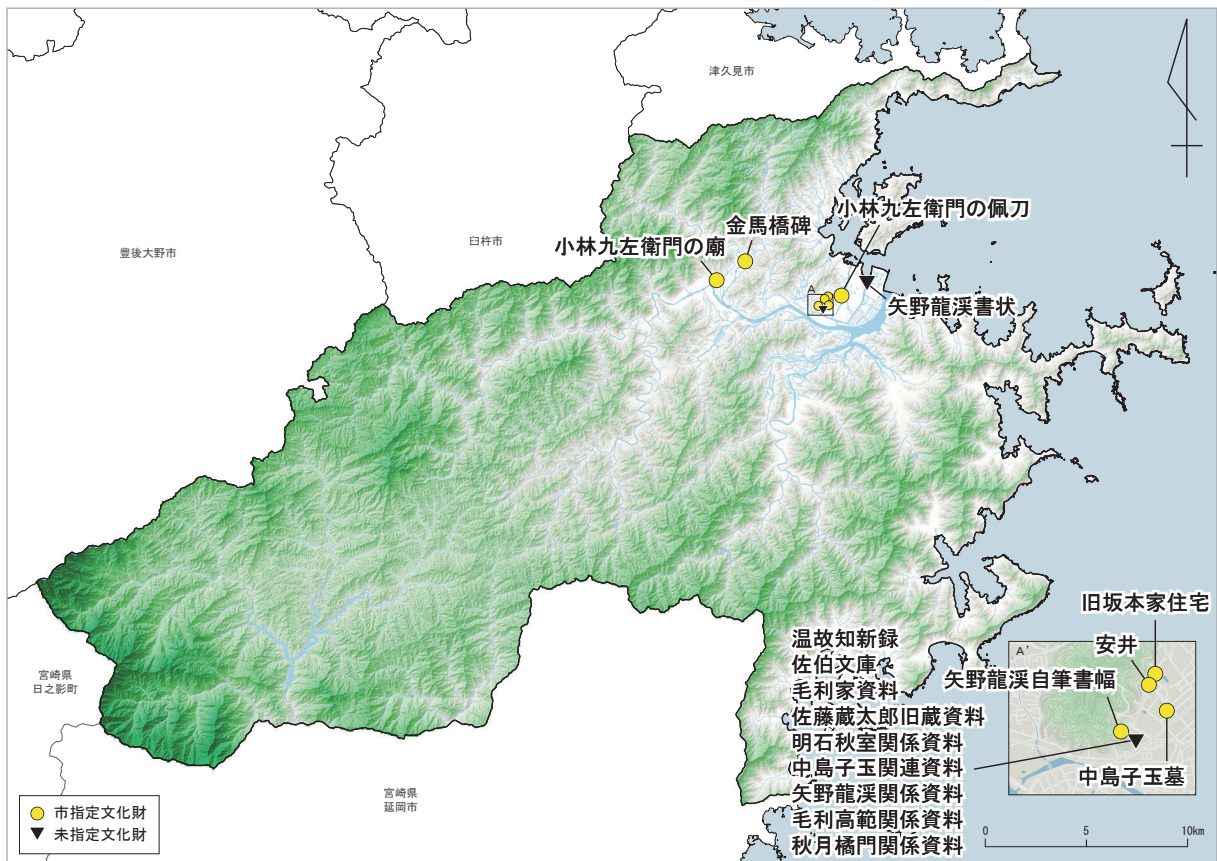


図 3-10 「文教のまち 佐伯と先哲」の構成歴史文化資源分布図

⑩ 多彩な芸能・行事の多様なルーツ

● ストーリー ●

本市内では様々な民俗芸能や行事が継承されているが、そのルーツは実に多様である。

宇目地区木浦鉦山の増産と作業の安全を願って、参加者が炭を塗りあう奇祭「墨つけ祭り」や、正月に一年の吉凶を占う宇目地区落水の「落水的はり祭り」、塚を造って焼くことで疫病を祓う、弥生地区江良の「疫神斎」などは、地域の特性から生まれ、受け継がれてきた行事である。

一方、他地域から伝えられた芸能も数多い。豊後大野市清川から伝わった宇目地区釘戸の「釘戸白熊」、延岡市三川内（宮崎県）に伝わる神楽を継承した蒲江地区丸市尾浦の「蒲江神楽」、豊後中部で広く継承される御嶽流岩戸神楽の系譜を継いだ蒲江地区葛原浦の「葛原神楽」などは、それぞれの地域から伝えられ、現在まで継続している。「堅田踊り」は、江戸時代に佐伯地区の堅田が幕府領であったためか、所作に上方（京都府周辺）の影響が見られる盆踊りである。また市内でも、弥生地区から直川地区赤木へと伝わった「風流杖踊り」、弥生地区・佐伯地区・臼杵市野津町からの影響で独特の型となった、宇目地区河尻の「荒川流河尻杖」のような地区間での伝習も認められる。

このように、本市で継承されてきた数々の多彩な民俗芸能や行事は、それぞれの地域性や歴史を反映しており、いくつもの地域との交流を持ちながら、独自の文化を生み出し、受け継いできた佐伯の歴史文化の多様性を示す歴史文化資源である。

表 3-11 「多彩な芸能・行事の多様なルーツ」の構成歴史文化資源

名称	分類	指定
神踊・杖踊	無形の民俗文化財	県指定
佐伯神楽	無形の民俗文化財	県指定
風流・杖踊	無形の民俗文化財	県指定
千束楽	無形の民俗文化財	県指定
蒲江神楽	無形の民俗文化財	県指定
早吸日女神社八人太鼓 附獅子舞	無形の民俗文化財	県指定
葛原神楽	無形の民俗文化財	県指定
堅田踊り	無形の民俗文化財	県選択
とんど焼	無形の民俗文化財	市指定
小半の扇子踊り・団七踊り	無形の民俗文化財	市指定
墨つけ祭り	無形の民俗文化財	市指定
田原獅子	無形の民俗文化財	市指定
宇目神楽	無形の民俗文化財	市指定
重岡獅子	無形の民俗文化財	市指定
重岡岩戸神楽	無形の民俗文化財	市指定
荒川流河尻杖	無形の民俗文化財	市指定
酒利獅子	無形の民俗文化財	市指定
上津小野獅子	無形の民俗文化財	市指定
釘戸白熊	無形の民俗文化財	市指定
中津留楽	無形の民俗文化財	市指定
落水的はり祭	無形の民俗文化財	市指定
風流杖踊り	無形の民俗文化財	市指定
塩見白熊	無形の民俗文化財	未指定
疫神齋	無形の民俗文化財	未指定
宇目の唄げんか	無形の民俗文化財	未指定



図 3-11 「多彩な芸能・行事の多様なルーツ」の構成歴史文化資源分布図